



三瀨コラム 中国「津津有味」-39

論説体を用途別に分類すると、新聞・雑誌、学術論文、法律・商用文、文学、ネット上の文などに分けられますが、新聞・雑誌、学術論文はほぼ同一と言ってよく、法律・商用文も、一部の専門的な言い回しを除けば、その亜種と言ってよいでしょう。

「論説体」はこのように各分野に広く使用されているため、その優れた翻訳者を育成することは極めて重要になります。しかし、現状はその育成が不十分であり、それがビジネス上でも大きなネックとなっています。なぜ育成が不十分なのでしょう。

第一の理由は「書面語は限りなく話し言葉に近づくべき」という基本原則から、書面語を独自のジャンルとして研究することが長年にわたりタブー視されてきたことにあります。市販されている文法書には論説体の主要な特徴に関する記載がほぼ抜けています。学会の発表でも、書面語に特化した論文はまず皆無と言ってよいでしょう。したがって、中国語を学び、新聞記事などを読んでも、話し言葉との違いが解らないため、学習者はいたずらに混乱するだけで、読解能力は一向に向上しません。

第二の理由は、論説体のつかみどころの無さにあります。その主な理由を時系列的に見てみましょう。

- 1) 普通話普及開始の時点では、現代中国語書き言葉を極力、平易な話ことばに近づけることが求められ、まず、1919年の五四運動を契機に新聞の文体に劇的な変化が生じ、1949年の中華人民共和国建国を機にその改革が浸透しました。
- 2) しかし、中国語は本来、韻律を極めて重視する言語であり、平易な庶民の言葉を柱とすることが教育の普及に大きな成果を上げた一方、文化としての「文章作法」を求める内発的衝動は消し去れるものではありませんでした。
- 3) このような要因から、改革開放以後、現代書面語で、格調高い文章を模索する動きが顕在化し、口頭語を母体とした新しい書き言葉の構築が模索されました。
- 4) こうしてそれぞれの執筆者個々が、自然発生的あるいは意図的に新しい文体を編みだしていきました。
- 5) これら個別の文章作法は、個別の使用例として泡沫のように消えたものもある一方、多くの読者或いは同業者からその価値を認知された工夫は共有化され、蓄積されていきました。

上記の変化の過程はいまだ進行中で、これが論説体の特徴を確定しにくいものとし、論説体に含まれる口頭語との違いの認識をなおざりにし、口頭語に関する文法知識だけで論説体の翻訳に取り組むことで、多くの誤訳が生じる事態になったのです。

ここ数年、中国の大学や政府機関で翻訳者養成の訓練に携わってきましたが、その結果に

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



対して必ず聞く言葉が、「なぜこの学生が一番なのか、こちらの学生ではないのか」という質問でした。それは、翻訳の評価があまりにも“口译”に偏り、“笔译”が軽視されていたからで、これは日本でも同様です。一般的に“口译”が得意な人は、文意を深く読み取ることが必要な“笔译”が苦手です。しかし、企業が情報を集め、分析し、戦略を練るには新聞や論文の翻訳などの“笔译”が極めて重要になります。千里の道も一歩から。今後の中国ビジネスのためにも、“笔译”人材育成に対する企業の気づきが強く求められており、まさに焦眉の急です。どうしたらよいか、を具体的に考えようという企業は是非ご相談ください。